プノンペン、ニューヨーク、イサカ三都物語（下）

～チャレンジ精神を持って、郷に入らば、郷に従え～

カンボジア経済財政省租税総局チーフアドバイザー　武藤　静城

【前号の主な内容】

前号「プノンペン、ニューヨーク、イサカ三都物語（上）」編では、

1　はじめに
2　カンボジアあるある物語～初の開発途上国編
（1）カンボジアってどんな国？
（2）貧富の差の激しい首都プノンペン
（3）Q&Aコーナー
3　カンボジアで3つの顔を持つ男
（1）カンボジア経済財政省租税総局チーフアドバイザー
（2）王立プノンペン大学客員教授

につき記載しています。

プノンペン、ニューヨーク、イサカという2カ国3都市で海外赴任生活を経験した筆者が、前号では現在の居住地プノンペンでの仕事、生活を通じ、感じ、学び、考えたことと同時に、ショックを受けたことなども、忌憚なく記載しています。日本では常識のことでも海外では非常識なこともあり、またその逆も然りです。「郷に入らば、郷に従え」という諺も、ある時には「郷に入っても郷に従うな」のほうが重要であることもあり、「郷」である各国各都市での勤務、生活の実体験を、日本との比較をしつつ、リスクマネジメントを用いた海外生活に必要な条件などを紹介しています。

前号では、特にカンボジアそしてプノンペンについて、日本人の一般的なイメージとは大きく異なる真の姿を、統計資料などを用いて説明するとともに、旅行ではなくプノンペン在住であるからこそ把握できる各種体験・実情を、Q&Aコーナーも設けて綴っています。

それでは、引き続き、孤軍奮闘三都物語（下）編をご覧下さい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

3　カンボジアで3つの顔を持つ男

（1）カンボジア経済財政省租税総局チーフアドバイザー：前号記載

（2）王立プノンペン大学客員教授：前号記載

（3）カンボジア空手連盟アドバイザー

私は、（公財）全日本空手道連盟公認5段（空手道錬士）、組手・形公認審判員資格を有するほか、（公財）日本スポーツ協会公認空手道上級コーチ資格などを有しています。カンボジアは実は空手が非常に盛んで、多くの空手道場があります。本業であるJICA専門家としての仕事とは別に、私は、日本とカンボアジの友好親善に役立てたいという一心から、CJCC（カンボジア日本人材開発センター）にて週1回、初心者からアスリートまでを対象に、日本空手道教室を開催しています。勿論無料です。

カンボジア経済財政省のオーン・ポーンモニラット大臣兼上級大臣（カンボジアでは副首相級の上級大臣が存在します）は、JICAチーフアドバイザーとしての私の仕事上のトップの大臣ですが、カンボジア空手連盟会長でもあり、空手の有段者でもあり、ご自身の道場も有しておられます。こうしたことがご縁で、上級大臣からカンボジア空手連盟アドバイザー就任を要

写真4　オーン・ポーンモニラット経済財政上級大臣と大臣室にて

写真5　空手の稽古後に熱心な子供たちと一緒に

請され、同連盟の組織改革に携わるとともに、ナショナルチームの指導も行っています。2017年8月には、カンボジアナショナルチームを引き連れて、マレーシア・クアラルンプールで開催された、東南アジア版オリンピックともいわれる国際大会SEA Gamesに参加しました。胸にカンボジアの国旗を掲げ、ナショナルチームのユニフォームを身に付けての参加は初体験で、とてもエキサイティングでした。カンボジアの選手は国際試合の経験に乏しく、自らのプレッシャーで負けており、試合結果は惨敗でしたが、今後はテクニック、メンタルを強化し、メダル獲得を期待したいものです。最大の目標は、2023年にカンボジアで初めて開催されるSEA Gamesでの金メダル獲得です。

カンボジアの閣僚で空手愛好家は非常に多く、経済財政省上級大臣をはじめ、教育・青少年・スポーツ省大臣、水資源気象省大臣、商業省大臣など多くの大臣とも、空手がご縁でお付き合いさせて頂いています。カンボジアの大臣の力は非常に強く、ある日、経済財政省上級大臣に呼ばれた私は、王立プノンペン大学に行きました。すると、カンボジア空手ナショナルトレーニングセンターの候補地選定のために実際の場所を見てくれとのことでした。立地もよく、他の候補地であるオリンピックスタジアムよりこちらのほうが良いと伝えたところ、その場で、その土地を管轄している教育・青少年・スポーツ大臣に電話し、内諾を得て、同センターの場所が決定されたのです。

私は、空手を学生時代からやっていますが、空手の関係で良好な関係を作ることで、仕事上でもスムースに事が運び、大臣室もすんなり入れるようになったのは、空手のおかげです。特に開発途上国では、人と人とのつながりによるところが大きく、すんなりといかない仕事の案件があっても、大臣から「武藤さんがYesならそれでいいですよ。」と承諾して頂けるのは大変ありがたいことです。もちろん、ちゃんと仕事したうえでの話ですよ。

週末、地方の空手道場に指導に行くこともあるのですが、すごく田舎の道場であるにもかかわらず立派な空手専用道場があり（但し冷房不完備、マットの上は鳥の糞が散乱）、子供たちがざっと100人近くいることもあります。100人も中に入れないため、空手の基本を覚えていない初心者は道着を着せてもらえず、道場の外の炎天下で別メニューで稽古です。初めて指導に行った時のこと。彼らにとって日本人を見るのも初めてらしく、まして日本のナショナルチーム用の「JAPAN」の文字と日本の国旗を付けた道着を着ている人は、彼らにとってまさに神であり、稽古後、「写真を一緒にとってもらえませんか」と初めて言われた時は驚きました。特に、サインを求められた時は書いていいものか悩みましたが、アイドルになった気持ちで“謙虚に”日本語と英語でサインさせて頂きました。

4　ニューヨークあるある物語～ニューヨーク駐在編

私の2回目の海外駐在は、2004年から2年間、国税庁ニューヨーク駐在員（長期出張者）でした。アメリカの税制、税務行政制度に関する調査を主に行って

いましたが、IRS（米国内国歳入庁）との直接関係はなかったため、私は敢えて個人的な関係確立にチャレンジしました。すなわち、ニューヨークで開催されたTax Seminarに参加した私は、誰にでも声をかけ、名刺交換し、人的関係を築こうとしました。非常に厚かましいものでしたが、おかげで一人のIRS査察官と仲良くなり、本物の査察官バッジ（FBIバッジのようなものを持っていました）も見せてもらい、その後も何回か一緒にお酒を飲みにも行きました。

また、アメリカの税法を細かく調べる必要があった時、大学のロースクールに行かないとそれが手に入らないことがわかりました。ニューヨーク・マンハッタンで税法関係の専門書の多いロースクールといえば、やはりニューヨーク大学ロースクールです。しかし、簡単に誰でも入れるものではありません。ここでも厚かましさを発揮。すなわち、伝手がなければ伝手を作ろうと決心し、以前留学したコーネル大学の先生にニューヨーク大学の先生を無理やり紹介してもらい、ロースクールの年間入館証を無事に手に入れ、本を借りることも、コピーも自由に出来るようになりました。これにより、本来業務が円滑に進んだのはいうまでもありません。

当時、私はマンハッタンのグランド・セントラル駅から北へ電車で30分のスカースデールという住宅街に住んでいました。そこでも、日本の習慣では考えられないことが多々ありました。

ある日、私は国税庁への書類提出のため、駅前郵便局のパーキングメーターに25セントコインを入れ、車を駐車したところ、この日はなぜかカウンターは長蛇の列。駐車満了時間を1分経過していたので走って戻ったところ、駐車禁止の違反チケット。近くの駐禁おじさんに必死に懇願しましたが完全無視。仕方なく、違反チケットを一生懸命読んでいると、何と本日中に支払えば確か半額の10ドルで良いと書いてあるではないですか。すぐさま指定の裁判所窓口に行き、10ドル支払って一件落着。アメリカは州によって交通法規は異なりますが、こういう世界もあるのだなと実感しました。日本も同様の制度があれば、未納が減るのかもしれません。駐車違反といえば、もう一件。留学時にカナダのモントリオールに行った時のことです。モントリオールオリンピックのあったこの都市は、カナダのケベック州にあり、フランス系カナダ人が住民の大半で、第1言語はフランス語です。このため、道路標識もフランス語で書かれていました。フランス語の読めない私は、万国共通の駐車違反マークをしっかりと確認の上で車を駐車し、記念写真を撮って車に戻ると違反チケットがワイパーに挟まれているではありませんか。違反チケットは、フランス語と英語の併記ですが、肝心な違反理由は警察官の手書きのフランス語。読めません。そのままアメリカの家に戻り、友人に読んでもらうと、何と私は住民以外駐車禁止の場所に車を止めていたらしいのです。万全を期したはずなのに…と思いつつ、罰金を郵送しようとしていると友人曰く、「何で支払うんだ。外国人にわかるわけがない。クレームするべきだ」と。だめもとで、モントリオール警察署に延々と言い訳を書いた手紙を送ったところ「わかった、今後気をつけなさい」とのこと。日本ではありえないことが、海外ではありうることの一例でした。

また、子供に対する教育も、日本とは全く異なり、日本を基準で考えると驚きの連続でした。すなわち、のんびり主義とエリート精鋭主義の共存でした。当時Edgewood Elementary School1年生であった長女の授業内容は日本のまるで幼稚園のようでした。とにかく楽しければよいという感じで、ある日、パジャマデーというのがあり、なぜか全員普段のパジャマで登校し、ぬいぐるみなど自由に持ってきて一日を過ごすというものです。日本の教育熱心な親御さんからすればクレーム対象かもしれません。

一方、特にスポーツに関しては、とにかく楽しませる主義であって、試合も楽しませる一環でした。但し、その中からいわゆる出来る子に対してはエリート精鋭主義を徹底していました。娘を例にとると、夏休みに町のプールに行った時のことです。全く泳げないため、水遊びしていたのですが、これを機会に水泳を学ぼうとしたところ、選抜テストがあり、それに合格しないとプールを使えないとあり、水遊び目的の娘はそれなりに必死でした。2週間後のテストで12メートル泳ぐことが求められたのですが、娘は8メートル付近と11メートル付近で2回溺れ、あやうく中止になりそうだったのですが、最後は沈みながら根性で12メートルの壁をタッチし、ぎりぎり合格。それか

ら夏休みのプール生活が始まったのですが、1〜2週間ほど練習したら、すぐに試合。しかも、タイム計測は手動ストップウォッチではなく、タッチすると100分の1秒まで計測できる電子掲示板方式。世界水泳大会でよく見るタイプです。小学生の町の大会でここまでいるの？　と正直思いましたが、アメリカ人にとっては当然のこと、小さいときから大人と同じ環境のもとで慣れさせ、プライドをくすぐるようです。それで気を良くした娘は、鬼ごっこの感覚で人より早くタッチしたく、結果としてタイムが伸びたところ、コーチから私が呼ばれ、「あなたの娘をGale大学のスイミングクラブに入れようと思いますが、同意しますか？」と尋ねられ、本人の意思を尊重して行かせたものの、そこでのトレーニングは過酷。徹底的な少数精鋭主義で、毎日7キロ泳いだり、フォームを矯正したうえで徹底的にタイムトライアルを行ったり、凄まじいものでした。結果、日本に帰国する前のニューヨーク大会で総合成績2位となり表彰されたのは、良い思い出です。その時でも、子供の頭の上に月桂樹の冠を載せてくれ、娘はまさにオリンピックのメダリスト感覚でした。彼らは、子供たちに常に夢を与えようとしており、娘が日本へ帰国前の最後の言葉は「See you in Olympics」。日本であれば、何を言っているんだろうということでも、さりげなく、当たり前のように言うアメリカンスタイルには格好良さも感じました。

ところで、アメリカといえば、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件は忘れることができません。実はその時、私はマンハッタンにいて、目の前でワールドトレードセンターが崩れていくのを目の当たりにした目撃者の一人なのです。留学先に立ち寄り、9月12日の飛行機で日本に帰国予定であった私は、マンハッタンのタイムズ・スクエアに宿泊していた時のことです。休暇だったため、ゆっくりとしていた私は、予定通り起床していれば、ワールドトレードセンターに行っていたかと思うとぞっとします。CNNニュースで遊覧飛行船が衝突？　との第一報が入った後、私は娘を肩車し、近くの美味しいパン屋さんにチョコクロワッサンをのんきに買いに行っており、2機目が衝突した時の衝撃は今も忘れられません。米国大統領専用機エアフォースワンも大統領を乗せ、離陸し、緊急避難しました。当時3歳であった娘も、幼い心によほどインパクトが強かったのでしょう、当時のことをしっかりと覚えており、「このビルね、壊れちゃったの。煙がモクモク出て、お空が真っ白になっちゃったのよ」と後日、崩壊前のワールドトレードセンターの映像を見て言っていたのは心に響きました。その後、9月12日の搭乗予定であった飛行機は当然のごとくキャンセルされたため、翌13日にJFK空港に再び向かい、チェックインを済ませ、やっと飛行機に乗れると思った搭乗開始5分前のこと、突然、FBIと書かれた防弾チョッキを身に着けた屈強な警官が自動小銃の引き金に指を入れながら「空港は閉鎖した。すぐに空港から出て行け」と命令したため、「なぜだ」と問うた私に「No Reason」との強い口調とともに銃口を向けられたため、仕方なくホテルに戻ったり、日に日にマンハッタンから車がいなくなったり、全面飛行禁止区域に指定されたマンハッタン上空を米国空軍の戦闘機が、近づいてくる飛行機は民間機といえども全て撃墜せよとの指令を受け警戒したりと、多くの緊迫した現実のドラマがありました。当時は、目の前の出来事が現実のものか、テレビのドラマなのかわからなく時もあり、私自身相当混乱していました。

この時、飛行機の予約は受け付けておらず、JFK空港で飛行機に乗れる人だけが乗るという状況下、私は最終的に空港を3回訪れ、、ようやく9月16日に日本に帰国でき、17日から財務省に出勤しましたが、朝の地下鉄の乗客が全員テロリストに見えたのは、今でも鮮明に覚えています。

5　イサカ（ニューヨーク州）あるある物語〜コーネル大学行政大学院留学編

私の最初の海外赴任は、1996年からのニューヨーク州イサカ市にあるコーネル大学行政大学院への留学でした。留学前、TOEFLを受けたこともなく、またGREとは何？　という状態から始め、合格通知獲得には大変な道のりでしたが、それを通じて得たものは非常に大きいものがありました。

今振り返れば、当時大蔵省大臣官房調査企画課海外経済係長として勤務していた私は、突然人事担当企画官に呼ばれ、「留学と海外勤務どっちがいい？　明日までに答えてくれる？」とやさしい言葉で、重いこと

を求められました。一晩、必死で考えた後、留学の道を選ばせて頂いた私は、その旨報告すると、「わかった。あとは合格通知持ってきてね。それだけ」とそっけない返事（失礼な書き方で申し訳ありません）。どこかの大学を準備して下さり、行くだけかと思い気や、そんなに大蔵省は甘くない。その日から夜中の試験対策が始まったのは懐かしい思い出です。

受験を終え、ようやくコーネル大学まで辿り着いた私への先制パンチは、PCルームでの出来事。教授に文章をPCで作成できるかと聞かれたので「Yes」と答えたあと、いざ文書を書こうとしたら、なんとそれはWindowsのWordを使用するものだったのです。読者の皆様には、Wordできないの？　と思う人もいるかもしれませんが、ここで弁解させて頂くと、今でこそWordは当たり前ですが、当時、役所ではWindowsやOfficeは使っておらず、富士通のOasysというワープロ専用機しか使用していませんでした。国会用のポキポキ（現在この用語は使わないようですが、当時の大蔵省では大臣発言要領のことをこういっていました）もこれで作成していました。このため、教授から「君は文書作成できるといったくせに、嘘をつくな」と言われた私は「嘘は言っていない。Oasysなら使える」と反論すると、「Oasysって何だ？」といわれ、あとは無視、ひどい目にあいました。ワープロなどはそもそもなく、Wordが文書作成ソフトとして常識であった米国大学の世界では、日本の状況など関係なかったのでしょう。私がもう少し事前に郷に入っていればと今頃後悔しています。

大学生活も日本の大学とは大違いです。日本の常識が通じない、或いは日本で経験したことのなかったことをいくつか挙げると次のようなものです。

・キャンパスが広すぎて、自転車で行かないと次の授業に間に合わない。それを考えずに科目選択したのは自分の責任でした。
・授業後に質問すると「なぜ、今頃質問して来るんだ。授業中に質問しなさい。そうしないと質問内容を全員で共有、議論できないじゃないか。後から質問に来られると、授業内容を思い出すのに私も時間がかかり、時間の無駄である」と教授に叱られました。
・特に政治学の宿題は半端ではなく、最もハードだったのは、2週間以内に「指定の3冊を読み、内容をまとめた上で、自国とアメリカの比較を、シングルスペースで30枚以上書きなさい」という課題に加え、私には別途、「米国と日本の国税徴収制度を比較し、その分析と自論展開をせよ」という宿題が与えられ、1週間後、全員の前でプレゼンテーションをするというものでした。無茶振りの宿題は当たり前。
・宿題がグループレポート作成の場合は、当然、グループで役割分担し、最後に持ち寄って完成版に仕上げるのですが、集合時間が異常でした。メンバーの都合に合わせて、朝4時集合。彼らには体力があります。
・アメリカの大学は、入学は簡単、卒業は難しいといわれますが、まさにそのとおりです。修士論文は大変で、提出期限前の1カ月間で、私の体重は10キロ減りました。論文指導下さる先生も大変で、恩師Arch T. Dotson博士は、癌と闘病中にもかかわらず、毎週火曜日は朝8時から私の専用時間を確保下さり、またそれ以外でも昼夜を問わず、研究室、自宅で論文指導をして下さいました。

こうした米国での勉強に忙しいなか、長女が生まれました。5月の卒業前の3月のことです。それから20年。先日、誕生日にプノンペンに来ていた娘と二十歳のお祝いを高級フランス料理店にてシャンパンで乾杯しました。娘にとって初のアルコールでした。コーネル大学の卒業式は、キャンパス内のアメフト場で行われるのですが、非常におおらかな卒業式で、私は娘を抱っこしながら行進し、式に参加し、修了証書を頂きました。

ここで、アメリカでの出産事情を思い出すと、日本とはまた大きく異なり、「？」の連続でした。例えば、

・出産直前に質問表を渡され、記入するのですが、その中の一つに「生まれる子の父親は誰か？」とあり、選択肢の一つには、「不明」という選択肢があり、びっくりでした。
・父親の出産立会いは、当然の義務でして、私が躊躇していると「本当の父ですか」と疑われました。
・生まれた直後、赤ちゃんの身体を洗う桶などの習慣がないため、トイレ横の普通の洗面台で適当にジャブジャブ洗い、「はいどうぞ」と渡されました。但し、綺麗には全く洗ってくれません。もっとも、

4,205グラムで生まれ、医者から「Hi! Giant Baby!」と呼ばれていた我が娘を片手で洗うのは米国人といえども大変そうでしたが。

・通常出産の場合、約3日後には退院するのですが、赤ちゃんはすぐに毛糸の帽子と毛糸の手袋を付けさせられました。米国人の赤ちゃんは、基本的に生まれた時に毛がほとんど生えておらず、頭からの放熱に伴う体温低下を防ぐためだそうです。退院時、車にチャイルドシードが固定されていなければ、赤ちゃんを引き渡してくれません。

6　おわりに

本稿をご覧になられた皆様の中には、これから海外赴任する方、海外旅行が好きな方など多くの方がいらっしゃることと思います。長期滞在と短期旅行では、勝手がかなり異なりますが、世界のどこであっても海外勤務、生活をするうえでの重要なキーワードをまとめとして、私なりにいくつか挙げました。

(1) 郷に入らば郷に従え！　そして、時には郷に入っても郷に従うな？：郷に入る際、「恐れずに異文化に飛び込む」という心意気がまず不可欠です。但し、何も無謀に行けというのではありません。リスクマネジメントをしつつ、「君子危うきに近づかず」を実践しつつ、飛び込むということです。海外ではテロの危険は日本に比べ高く、人間は銃弾、爆弾には勝てませんから。交通法規を放棄する国では、郷に従ってはいけません。そのためには、その「郷」を事前によく調べ、入ってからもリスクマネジメントを怠らないことが重要です。

(2) 日本の知識：海外の人は、自国のことを歴史を含めてよく勉強しています。このため、日本人に対してはこと細かく日本のことを聞いてきます。海外から日本を見ると、日本人でも意外と日本ことを知らない部分が多いんですね。勉強が大切です。

(3) 柔軟性：やはり自分の尺度でモノを計ってはコトは進みません。まず、相手を受け入れましょう。

(4) 厚かましさ：英語が下手でも喋りましょう。相手は自分以上に下手かもしれません。

(5) 情熱：特に途上国でのODAに携わる場合、その国を愛し、その国の首相、大統領になったつもりで、発展させようという情熱が必要です。プライベートの時間でも、熱意を持って取り組めば何でも乗り越えられます。

(6) 主体性：待っていては何も起こりません。自ら行動を起こしましょう。「やろうと思います」だけでは何の成果もありません。やると決めた以上、その結果を自らに求めましょう。

(7) 趣味の多さ：多彩な趣味は、特に途上国生活では重要です。趣味がないと、土日や平日の夜にでも、仕事以外にすることがありません。特に海外では芸は身を助けます。

そして最後に、

(8) チャレンジ精神：初めて訪れる土地では当然ながら不安な気持ちになります。でも、怖がる前にまず、飛び込んでみましょう。海外にいなければできないこと、海外にいるからこそできることをする、これこそ、海外生活の特権であり、最大の醍醐味ではないでしょうか。

父から教わった私の座右の銘でもあるアメリカの詩人サミュエル・ウルマンの詩を最後に紹介したいと思います。

“青春とは心の若さである。信念と希望に溢れ、勇気に満ちて、日々新たな活動を続ける限り、青春は永遠にその人のものである”

では皆さん、快適な海外生活を！ 素敵な海外旅行を！

プロフィール

武藤　静城（むとう　しずき）

1987年より国税庁（東京国税局）を皮切りに、大蔵省大臣官房調査企画課（現財務省総合政策課）、財政金融研究所（現財務総合政策研究所）にて、ドイツ連邦銀行ウォッチャーとしてドイツ経済金融分析を担当したほか、ODA業務に従事。この間、米国コーネル大学行政大学院に留学（行政学修士）。税務大学校では国際研修担当教官として、海外の税務行政官に税法・税務行政を指導した後、国税庁ニューヨーク駐在員（長期出張者）として従事。東京国税局では、調査部にて主に移転価格税制を中心とした国際課税を担当。2015年より現職。